

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
伐	バツ うつ きる ほこる 常①								法華義疏
伏	フク ふす ふせる したかう 常①								王勃詩序
位	イ くらい 教4 常①								聖武天皇雜集
何	カ なに なん いずれ 教2 常①								王勃詩序
									風信帖
伽	カ き とぎ 人①								豐替指歸
佐	サ すけ たすける 常①								聖武天皇雜集
									趙志集
作	サク サ つくる なす 教2 常①								王勃詩序
									空海 金剛般若經開題
伺	シ うかがう 常①								王勃詩序

【位】 金文、古璽の字体は「立」だけでニンベンがない。
 【佐】 説文にないためか干祿字書、五經文字、九經字樣、開成石經のいずれにも見えない。「工」が「匕」になる異体字は中国の南北朝の頃から。
 【作】 甲骨ではニンベンがない。漱石は草書の字体も使う。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
伐	伐	伐	伐				伐	伐		伐		伐
元暦萬葉⑦	節用	人4										現代中国
伏	伏	伏	伏	伏			伏	伏	伏	伏		伏
元暦萬葉⑦	節用	人4										現代中国
位	位	位	位	位			位	位	位	位	位	位
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
何	何	何	何	何			何	何	何	何	何	何
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
何	何			何								何
元暦萬葉④	本願念仏利益草											鎌倉・墨流本朗詠 江戸・五条俗謡集
伽	伽	伽	伽				伽	伽				伽
日本紀遠望和歌	節用	人5										現代中国
佐	佐	佐	佐	佐	佐		佐	佐		佐	佐	佐
元暦萬葉①	節用	人5										北宋・蔡京 現代中国
佐	佐											佐
元暦萬葉①	本佐録											鎌倉・墨流本朗詠 鎌倉・武天院龍眼
作	作	作	作	作			作	作	作	作	作	作
元暦萬葉①	節用	人5										現代中国
作	作			作								作
尼崎萬葉⑤	節用											
作	作											作
雲紙本朗詠	節用											
伺	伺	伺	伺	伺			伺	伺	伺	伺		伺
元暦萬葉②	出世太平記	人5										現代中国

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期		
似	シ にる		大徐・人部	馬王堆	敦煌漢簡	十七帖	王獻之	元彦墓誌	孔子廟堂碑	王勃詩序	
住	ジュウ すまう すむ とどまる							集字聖教序	維摩經碑	雁塔聖教序	法隆寺觀物帳
伸	シン のばす のびる のべる		大徐・人部	孟巖殘碑	自叙帖	晋祠銘				五経・序	
体	タイ てい からだ		中山王方壺	泰山刻石	武威漢簡						
體	②		郭店楚簡	大徐・骨部	魯峻碑	武氏祠画像石	王羲之何如帖	張猛龍碑	雁塔聖教序	干祿・序	聖武天皇雜集
體	②		睡虎地秦簡	武威漢簡	張遷碑	十七帖	晋祠銘	王獻之	雁塔聖教序	干祿字書	法華義疏
體			睡虎地秦簡								豐碑指歸
躰	②							玄言新記明老部			法華義疏
但	タン ただし		大徐・人部	居延漢簡	西嶺華山廟碑	十七帖	贈近帖	劉碑造像記	九成宮	五経・序	瑠玉集
佃	デン つくだ		大徐・人部	武威漢簡	三老許字目日記			王次妃石龜墓誌	昭仁寺碑		

【似】説文では「目」に「人」がついた字体。そもそも「以」は「目」に「人」がついた字だとしたら釈然としない。古代の字体は「口」が加わっていたものもある。

【体】正(統)字体は「體」だが、隸書には「體」もあり、偏をニクヅキにしたものもある。草書は「體」をくずした字体だ

とおもう。干祿字書は「體」を〈俗〉としている。旁を「本」とする字体は、遅くとも唐代から現れる。太宰治が通(用)字体の「体」を書いている。

【但】漢代から右下の横線がナベブタ状になっている異体字あり。「国定教科書に於ける正字俗字一覧表」で異字としてい

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
似	似	似	似	似			似	似	似	似	似	似
住	住	住	住	住			住	住	住	住	住	住
伸	伸	伸	伸	伸			伸	伸	伸	伸	伸	伸
体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体	体
體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體
體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體
躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰
躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰	躰
但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但	但
佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃	佃

る字体を漱石が書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
低	テイ ひくい ひくまる ひくめる 教4 常①		𠄎 𠄏	隸	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伯	ハク おさ 常①	𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伴	ハン バン ともなう とも 常①		𠄎				𠄎	𠄎	𠄎
佑	ユウ たすける 人①				𠄎				
余	ヨ あます あまる われ 教5 常①	𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
餘	②		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伶	レイ 人①		𠄎				𠄎	𠄎	𠄎
依	イエ 常①	𠄎 𠄏	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

【低】説文の原本にはなかつたらしく、大徐本に新附字として掲載されている。唐代正字もない。旁が「互」の字体もある。ちなみに干祿字書では「互」の字体を「𠄎」とする。隸書に旁が「𠄎」に似た字体のものがある。現代中国では最終画は横線ではなく点。

【伯】西周まではニンベンがなく「白」だけ。
 【佑】説文不録。平安中期の桂宮本万葉、江戸期の大日本永代節用無尽蔵、ともに傍の「右」は、横線を先に書いている。
 【余】「余」と「餘」は本来は別の字だが通用する。漱石が両方の字体を書いているのには驚いた。使用例は「持て余してい

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
低	低	低	低	低			低	低	低	低	低	低
伯	伯	伯	伯				伯	伯		伯		伯
伴	伴	伴	伴				伴	伴	伴	伴		伴
佑	佑	佑	佑				佑					佑
余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余
餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘		餘
伶	伶	伶	伶									伶
依	依	依	依	依	依		依	依	依	依		依

る」、「餘り気の毒だから」、「汽車が余っ程動き出して」、「学資の餘りを」、「余っ程上等だ」、「余計な手数だ」、「余計な減らず口」、「年中持て余して」、「餘り上品ぢやないが」、「餘っ程えらく」、「余っ程辛防強い」、「蚊が餘っ程刺した」、「余計な発議」……さて漱石に使い分けの基準はあるのだろうか。

【依】大徐本と段注本の字体が異なる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
価	カ あたい		價		倭		價價		價
價	人②								
佳	カ よい		佳	佳	佳佳佳佳	佳	佳佳	佳	佳
侃	カン つよい		侃	侃	侃		侃侃	侃侃	侃侃
俠	キョウ きゃん		俠	俠	俠俠俠俠	俠	俠俠	俠俠	俠
倭	人③		倭						
使	シ つかう しむ つかい		使	使	使使使使使使	使	使使	使使	使

【価】説文不録。弘道軒に略字があるが、これはいつ作られたものか。

【佳】江戸版本には隣の「圭」の上の「土」を「大」に書くことがある。咎無し点がつくことが多い。

【侃】旁が「品」の字体が干祿字書で《俗》になっている。草

書では「口」が2つ並んだものが点3つになる。「侃」の隣の下部の点3つを「口」2つの草書と間違えて旁が「品」になったのだろう。

【使】甲骨と金文にはニンベンがない。草書(十七帖)の字体はニンベンを含むのか、含まないのか？ 江戸版本には草書の

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
價	價	價	価	價			價	價	價	価		价
	倭		價									价
佳	佳	佳					佳	佳		佳		佳
佳	佳											佳
		侃	侃									侃
		侃										
供	供	供	供	供			供	供	供	供		供
俠	俠	俠	俠				俠	俠				俠
		倭										倭
使	使	使	使	使			使	使	使	使		使
	使											
	使											
	使											

字体にニンベンを加えたものがある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
侍	シ さむらい はべる		侍	侍	侍	侍	侍	侍	侍
俣	フ あなどる		俣	俣			俣	俣	俣
併	ヘイ あわせる しかし ならぶ		併						併
俣	ジン まま		俣						俣
例	レイ たとえる たとえ		例	例	例	例	例	例	例
俄	ガ にわか		俄	俄	俄	俄	俄	俄	俄
係	ケイ かかり かかると つなが	係	係	係	係	係	係	係	係
侯	コウ きみ これ	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯
俣		俣	俣	俣					俣

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
侍	侍	侍	侍				侍	侍		侍		侍 節用 現代中国
	俣	俣	俣	俣			俣	俣	俣	俣		俣 唐賀知章孝経 現代中国
		俣										
併	併	併	併	併	併		併	併		併		併 江戸・農林業事 現代中国
	俣						(併)					
				俣	俣	俣						俣 漢字要覧 現代中国
		俣	俣				俣					
例	例	例	例	例	例		例	例	例	例	例	例 現代中国
俄	俄	俄	俄	俄	俄		俄					俄 現代中国
係	係	係	係	係	係		係	係	係	係		係 現代中国
侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯		侯 現代中国
俣	俣	俣	俣	俣								俣 現代中国

【侍】江戸版本では草書が多く使われ、行書は少ない。
 【併】4種類の正字の字体がそれぞれ違う。
 【係】傍の一面目が略されることあり。節用と弘道軒は傍の一面目を左から右に書いている。
 【俣】古代の字は「尸+矢」で「フ」は後に加わる。「フ」の

左ハライと「尸」の縦線が合わさってニンベンになる。「俣」が正(統)字体、「俣」の「矢」が「夫」になった字体が通(用)字体。『陸軍幼年学校用字便覧』では「俣」を(本字)としている。弘道軒四号には「俣」がみつからない。弘道軒三号には「俣」がある。弘道軒2は異字体だろうか？

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
俊	シュン すぐれる 常①		倝	倝	倝	倝	倝	倝	王勃詩序
儻			儻	儻			儻	儻	
信	シンのばすのびるまかせるまこと 教4 常①	信 信 信	信	信	信	信	信	信	王勃詩序
		信 信 信	信	信	信	信	信	信	
侵	シン おかす 常①	侵 侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	聖武天皇雅集
		侵 侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	
促	ソク うながす せまる 常①		促	促	促	促	促	促	王勃詩序
俗	ソク ならわし 常①	俗 俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	法華義疏
		俗 俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	
便	ベン ピン たよりに すなわち 教4 常①	便 便 便	便	便	便	便	便	便	王勃詩序
保	ホ ホウ たもつ やすんじる 教5 常①	保 保 保	保	保	保	保	保	保	鄭書指歸
		保 保 保	保	保	保	保	保	保	
		保 保 保	保	保	保	保	保	保	

【俊】五経文字では「俊」と「儻」は異体字。康熙字典では「俊」と「儻」は別に掲載されているが、「儻」の説明に「同俊」とある。「儻」は大徐には見えない。「俊」は干禄字書には見えない。
 【信】 傍の「言」はもともと「辛+口」の形で、「辛」は略されて「立」になる。すると「信」は「倍」と字体が衝突する。それで漢代に字体を変更したのだろう。
 【侵】 干禄字書と五経文字の正字体は同じ字体。大徐本の字体の傍は「帯+又」なのだが正(統)字体楷書でも「巾」を略している。「又」を「丈」に書く例も多い。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
俊	俊	俊	俊				俊	俊		俊		俊 現代中国
		儻								儻		儻 干禄(通) 干禄(正)
信	信	信	信	信			信	信	信	信		信 現代中国
		儻										
侵	侵	侵	侵				侵	侵		侵		侵 江戸干禄(俗) 現代中国
		儻										
促	促	促	促	促			促	促		促		促 現代中国
俗	俗	俗	俗	俗			俗	俗	俗	俗		俗 現代中国
		儻										
便	便	便	便	便			便	便	便	便	便	便 夏目漱石 現代中国
保	保	保	保	保			保	保	保	保		保 現代中国
		儻										
		儻										

【俗】「谷」の上部はもともと「ハ」が2つ重なったような形。か足のあたりに「ノ」状の曲線がある。これが「子」の左右南北朝時代には下の「ハ」がヒトヤネまたは横線のような形に配されるようになったのであって、傍は「口+木」ではなく、「子+ハ」。そもそもカタカナ「ホ」の元字だから、教育漢字のように「木」を書くのはおかしい。
 【保】「人」と「子」に関係する字とおもわれる。甲骨文字の形を明朝体にすれば「仔」となる。金文では「子」のおしり